

2023年10月28日

日本フランス語フランス文学会 全国大会(於・九州大学)

発表概要「1940年代のモバイルデバイス表象—ルネ・バルジャベルを中心に—」

中村 能盛

ルネ・バルジャベル(以降、バルジャベルと略記)は、一昔前までフランス文学史とフランス文学研究の範疇においては、忘却の彼方に追いやられたと言っても過言ではない作家であった。バルジャベルは、ナチス・ドイツの占領期にフィリップ・ペタンが掲げたスローガンである「労働・家族・祖国」を反映させたSF小説『荒廃』(1943)を出版し、さらに同書が、対独協力を行っていたと思しき占領期のドゥノエル社から出版していたことなどが、要因と考えられている。従って先行研究を読み進めていくと、バルジャベルの研究者がフランスではなく、他国に多いことが判明する。併せて、フランス国内ではいまだにバルジャベルの全集が出版されず、日本国内でも1970年代から80年代にかけて、数冊が翻訳された段階に留まっている状況下にある。

しかしながら、バルジャベルが1944年に出版した著書『完全映画.映画についての未来形態に向けたエッセイ』(以降、『完全映画』と略記)と、同書を原作として戦後の1947年に公開されたセミ・ドキュメンタリー映画『テレビ.明日への視線』(監督・レイモン・ミレ)などにおいては、当時のテレビの概念を超越した未来の映像環境の様相を描いている。『テレビ.明日への視線』には、原作で記述されていた3Dホログラムや監視カメラ、自動車に搭載されたテレビなどが登場する。そして現在のスマートフォンに相似したポータブルテレビなども劇中に登場し、人間が歩きながらテレビを視聴する場面や、カフェでテレビを視聴する場面などが確認出来る。従って、上述のポータブルテレビの概念は、現在のデジタルツールやモバイルデバイスの概念と酷似している。

本発表では、先行研究や他国のSF小説などについて概略する。次にバルジャベルが記述したモバイルデバイスの形状について、言及する。『完全映画』では、モバイルデバイスについて受信機と記述され、受信機の形状やサイズに関する詳述は散見されなかった。そして戦後に映画化された際は、手のひらサイズのプラスチックの素材を使ったと思しき外形に、機械の上手側にはアンテナとモニターが含有された機械であった。実際のテレビ史とラジオ史を手がかりとして実在した機種の種類と、本発表で調査した受信機との関連について検証する。

最後に、21世紀の現時点から巨視的な視点を通して、『完全映画』の頃にバルジャベルが描いていた心象風景を導き出すことに狙いを定めている。

名古屋大学大学院博士後期課程修了